

漢字教育の抜本的改革

(1) 漢字は読解力の基礎

読解力の基礎は漢字にあると思ひます。今から二十年程前に慶応義塾の普通部 中学に当ります で、漢字力と学力との相関関係を調査したことがあります。その結果、学力は漢字力に正比例してゐることが明らかにされました。その五、六年前に、アメリカの人間工学研究所が、語彙の理解力の調査をして、同じ様に学力との関係を調べた事がありますが、この調査でも、大学における専攻科目の如何を問はず、それぞれの学部で成績の一番良い者は、やはり語彙調査でも最高の成績を収めてゐることが解りました。

このやうに読解力といふものは大事なものですが、日本語の場合、その基礎は漢字にあると言ってよいと思ひます。ところが、今の日本で、中学生の平均漢字力は、文部省の調査によれば、約五百字だと言ひます。五百字といふのは、小学校で習ふ漢字のおよそ半数です。これでは中学の教科書が読めるわけがありません。

(2) 漢字学習の適時期は幼児期

漢字教育に最も適した時期は幼児期であります。ところが明治以来、漢字教育は小学校の三年以上に重点が置かれて来ました。一年生では片仮名、二年生では平仮名、三年生以上で漢字、といふのが明治以来の教育です(戦後は初めに平仮名、次に片仮名といふ順序に変わりました)。ところが、漢字は、幼ければ幼いほどよく覚えられますのでありまして、二、三歳の幼児でしたら、ひとりで漢字が覚えられます。小・中学生になりますと、覚えようと努力しなければ覚えられませんが、幼児は全く努力なしに覚えられます。それに漢字といふものは、努力しないで覚えた方が良いのです。私たちは日本語を全く努力なしに、自然に覚えたのでありまして、漢字もそのやうに覚えるのが良いのです。それは自然に覚えるといふことが、自然に使へるといふ能力になるからです。例へば「行く」といふ動詞、これは「行か・行き・行く・行け」といふやうに変化しますが、この変化は、三、四歳の子供でもちゃんと使ひ分けてゐます。ところが、外人にはこれがなかなかできません。それはそれが理解できないのではありません。理解できても使へないのです。

幼児は単に言葉を記憶するだけでなく、帰納的思考を働かせてこれ

を分類し、整理して法則をつかみ、これを演繹的^{えんえき}に使ふことをしてゐるのです。私の孫は三歳の頃^{ころ}、桃色の花を「ピンクい」花と言ひました。これは誰^{だれ}に教はったのでもありません。「白 白い、赤 赤い」から「ピンク ピンくい」と応用したのです。また、私が園長をしてゐた幼稚園で、子供が初めて見た漢字を読んだことがあります。それは「悪魔」といふ字でしたが、先生が黒板に書いた時、誰も読めませんでした。ところが、子供たちは「魔」の中から「鬼」を見つけ、これは鬼の仲間に違ひないと考へ、それから推^おして行^{つひ}って遂にアクマだらうと見当をつけたのです。

かういふ能力はどうも幼児期でないと働かず、また発達しないもののやうです。幼児には偉大な能力があつて、これは引き出せばどれだけあるものやら判^{わか}らないものがあります。有名な『ウェブスター辞典』のウェブスタ (Webster) は、父親が英語、母親がフランス語、祖母がドイツ語、女中がスペイン語を話す家に育つて、四カ国語を自然に使ひわかる能力を身につけたといふことです。幼児は誰でもこれができるやうです。ドーマン博士から、七カ国語を使ひ分ける幼児もゐると聞きました。かういふことは幼児だからできるのであつて、幼児期を過ぎてはとても出来ることではありません。

頭は使へば良くなるものですが、とりわけ大脳の発達するこの時期に頭を使はないと頭は良くなりません。漢字教育はゼロ歳から始めるのが良いと私は思つてゐます。ゼロ歳の子は、言葉より先に漢字を理解します。これは今日お配りした「月曜評論」(註)といふ新聞に、私の「脳障害^{ちれう}患者治療に効果的な漢字教育」といふ論文が掲載されてゐますが、その中に「漢字を先に理解し覚える赤ちゃん」といふ項があります。漢字は言葉より覚え^{やす}易いのでありまして、これは脳障害児の実験においてもはっきり確められてゐます。言葉が覚えられない脳障害児でも漢字は覚えられます。漢字を覚えれば頭の働きがよくなる。頭の働きがよくなれば言葉も覚え^{きしゅ}られる、といふわけですから。あの天才騎手といはれた福永洋一氏の場合、グレン・ドーマン博士の指導^{ちやくちやく}によつて着々と肉体的には回復してゐますが、言語面では思ふやうに進んでゐません。私はもし縁^{えん}があれば、彼に言葉の指導を試してみたい。漢字で言葉の訓練をしたら、もっと良くなるに違ひないと思つてゐます。

大体どんな能力でも使へば発達するものであつて、頭も一番使はねばならぬ幼児期にこれを使ふことが最も必要であります。ところが、日本だけでなく、世界中の幼児教育が、この「頭を使はせる」幼児教育を

やりませんでした。私はこの「頭を使はせる」のには、漢字を学習させることが一番いいと思ってゐます。それは漢字では「目」を知ってゐれば「見る」といふ字は目で何かすることだと推察がつかますし、「耳」を知ってゐれば、「聞」といふ字は耳で何かすることだと推察がつくからです。他の国の文字ではかうはいきません(eye と see とにはかういふ関係がありません)。漢字は推理力を養ふわけです。そしてこれを始めるのは小学校に入ってからでは遅いのでありまして、早ければ早いほど良いのであります。さういふわけで、ゼロ歳児が一番良い、と思ふわけでありませぬ。これはアメリカの例ですが、アメリカ宇宙計画の基礎を作ったと言はれるノバート・ウィーナー博士は九歳で大学に入学し、十四歳で卒業、十八歳で理学博士になってゐます。これなど、ゼロ歳から始めなければとても不可能な良い例です。

ただかういふことは、十八歳にならなければ大学受験が出来ない日本の今の教育界では、どうとり入れたらいいかといふと大変難しいことです。

(3) 漢字はひとりでに覚えさせる

さて、漢字を教へるといふことですが、私は、漢字はひとりでに覚えるべきものだと思つてゐます。私の幼児漢字教育では「教へる」ことをしません。ただ漢字を使つてみせれば良いのです。言葉といふものは生活の中でひとりでに覚える、これが言葉の覚え方です。それが言葉の学習の基本なのです。家庭で豊かな対話があると、自然に子供は言葉が豊かになります。それと同じことで、家の中に、「壁」とか「窓」とか「冷蔵庫」とか、漢字が目につく所に沢山^{たくさん}あれば、自然に覚えるものです。特に覚えることを期待してもいけないし、試してもいけません。極めて自然に扱ふことです。とにかく周囲で漢字をうんと使つてみせることです。そして子供の関心や疑問を引き出すことです。子供がそれを尋ねたら答へてやれば良いのです。かうすれば、小学校に入る前に今の中学生以上に漢字が読めるやうになることは確かです。一番記憶力のいい幼児期にこれをしてやらないのは大人の怠慢^{たいまん}だと私は言ひたい。幼児が一千字読めるやうになることは極めて容易で、実に簡孝なことです。